

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBL、マッキントッシュなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べるほかの多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。東京、目黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。

BBC LS3/1

前号で紹介した LS 5 / 1 はスタジオ専用として開発されたが、スタジオ以外の録音環境でも最良のモニタリングを可能にしてくれるモニタースピーカーとして LS 5 / 1 タイプとほぼ同時期に、より小型で可搬できる LS 3 / 1 を開発していた。このモデルも密閉型のキャビネット構造で大きさは高さ77×幅46×奥30cm。その箱の上部両サイドには金属製の取っ手がついている。搭載されているユニット類はLS 5 / 1と全く同じタイプのウーファーとトゥイーターで、多少変更を加えたネットワークにて構成されている。実際に鳴らしてみると、ピンポイントな音像定位と、その外観の大きさより想像以上のスケールの大きい音場感で驚かせられる。

本文 / 田中伊佐資
製品解説 / 岡田圭司(アトリエJe-tee代表)
撮影 / 小林幹彦(彩虹舎)



第18回 BBC Monitor Speaker system ②

BBCはNHKと同じような国営放送局であり、かなり昔から放送される音質の良いことで知られていた。その陰では音の美しさを追求して放送機器の性能を改善していくために、長い地道な研究開発の中から初代大型モニタースピーカーのLS / 1をはじめとして、ステレオ時代になってからはLS 5 / 1、LS 3 / 1が開発され、その後のLS3 / 5A等へと受け継がれていった。その実績はその後の英国のスピーカーメーカーであるKEF、ロジャース、チャートウエル、B&W、スペンドール、ハーベス等に大きな影響を与えていった。



箱の側面にある「LS3 / 1」のプレート。シリアルナンバー入り

同じ大きさの渦巻き状のイコライザーがついたトゥイーターが2つ見える。

スピーカー前面

箱の上部には、金属製の四角い枠取りされた縦25×横19cmの開口部があり、金属製の網の前にサランネットが張ってある。2個のトゥイーターはこの網の部分に縦に2個並べてネジで固定されている。その四角い枠取りの少し外側にあるネジ4本でLS 5 / 1に搭載されている38cmユニットと同じ物がマウントされていて、この正面の四角い開口部からのみウーファーの音が放出され、トゥイーターとの同軸ユニット構造になっている。

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

BBC Monitor ②

小さい開口部から生み出される 真正正銘のモニタースピーカーサウンド

アトリエJe-teeに入ると、ど真ん中にまるでロボットのようなスピーカーが置いてあった。「久しぶりに出たな、50年代のS.F調キワモノ・スピーカー」と思ったら、岡田さんは「この前の続きでBBCモニターです」と紹介した。奇をてらっているわけではない、大まじめな業務用なのである。前回のLS5 / 1とぜんぜん違う雰囲気にも納得がいかない。目玉を描いたらまるでNHKの「ビーもくん」じゃないか。だいたい金属のエンクロージャーってどうなんだ。そう思ってコンコンと叩いたら木製だった。素晴らしい塗装だ。変なところに感心した。

さらにびっくりなのが、これで38cmウーファーを内蔵していることだ。トゥイーターとスクーカーをその前面に同軸ユニットのようにマウントしている。なぜフロントの開口部は四角く、しかもこんなに小さいのだ。ウーファーの外周部分から出た低音はバッフルに当たってしまふ。中心部の低音は中高域ユニットにも当たる。

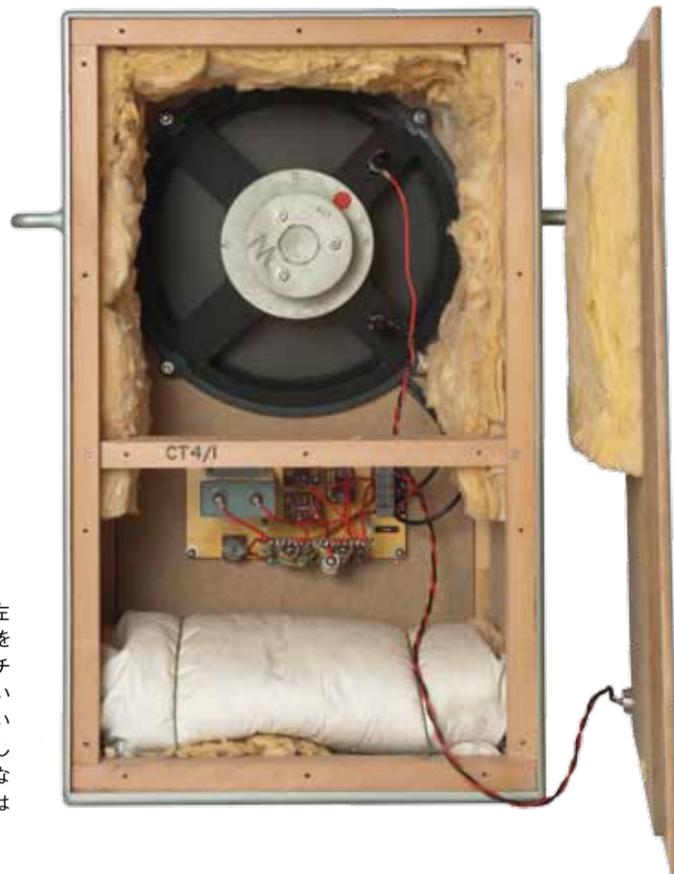
しかし取っ手があることからわかるように可搬式なので、移動中にユニットが何かとぶつかることを考えて、露出面積を最小限にしたかったのかもしれない。そしたら岡田さんが「これがあるのとなんでは価値がまったく違うのです」と四角い鉄板を出してきた。なんと前面の窓にはめ込んで、本当に保護できるようになっている。取り外したら、紛失しな

いように背面に止めておくこともできる。そこまで配慮しているなら、アクシデント防止のための小窓はない。ともあれ、前回と同じように英国つながりでビートルズの「ミッシェル」を聴いてみる。開口部が小さく点音源に近いせいか、像が締まっている。切れがいいという繊細さ。心配した低音はふんだんではないが、出るどころではきちっと出てくる。全体的にどこかモニターらしい折り目の正しさが印象的だ。

新しい録音のジュディス・オーウェンのヴォーカルは、スピーカーの製造時期を推測させることが困難な初々しいサウンド。高域のレンジは広く、温かみもある。ヘンデルの「メサイア」にしてもやはり適切な温度感でテノールがしっくりした音像で立つ。LS5 / 1と同じくヴォーカルものは、録音された時代やジャンルにかかわらず得意とみた。

50年代のビル・エヴァンス・トリオでは、ヴィンテージ的な黒光りする味わいというより、すごくプレーンでフレッシュな音を聴かせる。ベースが際立ってゴリゴリ来るような迫力はないが、全体がうまくまとまって、好感が持てる。やっぱりバランスを念頭に考えて作られているようだ。

LS3 / 1は見た目の第一印象では、無骨で風変わりな感じだったが、音を聴きながら顔を見ると次第に感情移入し、なんだか愛着がわいてきた。小窓の上に本当に目玉を描いてあげたい。



LS 3 / 1のネットワーク部

スピーカー内部

ネジ止めになっている後面バッフルを外すと38cmユニットが左右の幅一杯に搭載されているのが確認できる。キャビネットを構成する板は8mmの厚さで、薄い5層に張り合わせたパーティ材が使われていて、さらにその板には繊維質の固く1cmくらいの厚さ圧縮された吸音材がびっしりと隙間無く貼付けられている。また、ユニットの周りにはグラスウールのような吸音材、そして箱の底部分には吸音効果をさらに高めるために綿のような素材が布製の袋に封印されて装着されていて内部の構成はLS 5 / 1よりかなり試行錯誤されたのが伺われる。